

第五回定期勉強会アブストラクト

京都大学文学部第 4 講義室

2016 年 11 月 6 日 (日)10:00 ~ 17:30

タイムテーブル

- 10:00 ~ 12:00 現代物理学 ~ 拡張された自然 ~
- 12:00 ~ 13:00 休憩
- 13:00 ~ 16:00 トマス・リードの知識論
- 16:15 ~ 17:30 懇親会

現代物理学 ~ 拡張された自然 ~

物理学は自然の法則を解明する学問である。自然哲学の流れを十分に汲んでいるこの学問は、19 世紀までは、自然に対する我々の認識に従って発展してきた。しかし 20 世紀になって起きた 2 つの革命、相対論と量子論は、自然に対する認識すら組み替えて、物理学を新たな体系へと変化させた。

今回は、19 世紀までの物理学の視点から出発し、相対論、量子論とは何かということを現代物理学の立場で簡単に解説をする。最後に現代物理学での自然の捉え方について、それまでの物理学との違いを科学哲学の視点から解説をする。

特に予備知識は問わない。文系の方には、よく耳にする相対論と量子論とはどういうものなのかということを理解してもらうことを目標に、理系の方には、物理学と自然の関係性についてもう一度考え直してもらうことを目標に発表する。

トマス・リードの知識論

トマス・リードはいわゆる「スコットランド常識学派」の代表的人物として知られる 18 世紀の哲学者である。彼の哲学はヒュームの懐疑的議論への反発として始まり、フランスやアメリカにも影響を与えた。リードの影響を受けた現代の学者には、パース、ギブソン、ムーア、チザムなどが挙げられる。

今回はこうしたリードがどのような思想を展開したのかを、彼の生涯の略述から始めて、主著『人間の知的能力についての試論』を中心に考えてみたい。主なトピックとなるのは以下の三点である。第一に、ヒュームの懐疑的議論に対してリードはどのように応答したか。第二に、リードの常識原理の説はカントが言うように「大衆の判断に頼る」ものなのか。第三に、リードの知識観はデカルトの知識観とどのような違いがあるか。これらを通じて最終的には、リードの考える「常識に基づく知識理論」の特徴を示唆することができれば幸いである。